

『命令する芸術

英雄たちの大集会—

ニューヨークについて』

命令とは①いつけること。②目下の者に対してあらわす、自分の意思—などと辞典なみに解釈するとすれば、命令する芸術などとはいえなくなる。

命令する芸術と名付けたものの、その目的を言うことは非常に困難で、批評家でもない私自身には、ドダイ無理な相談なのだ。思いきって、誤解、敬意、同情など、それ等と関係ない家庭の事情、あるいは思いつきを述べて、その方向違いの周辺を語ってみることにしたい。

①命令という言葉をも極めて個人的に解釈し、家庭内に持ち込むと、オヤジと女房の関係となる。戦前はオヤジが通常命令者であり、戦後は子供と女房が、命令者としてノシ上がって来ているのがいつわらざる状況だ。それを簡単に割り切れば戦前のオヤジはサジスト、即ち一応男性的であった。戦後のオヤジはマゾで服従的、あるいは女性的男性へと変身している。しかし奥野健男が「しかし真実は逆である。サディストの方が心理的に劣等感を抱き、マゾヒストは優越感を抱いている。正確に言えば肉体的なサディストは、心理的にはマゾヒストであり、肉体的なマゾヒストは心理的にはサディストである。つまりその行為の外見と反対に、サディストは奴隷であり、マゾヒストは帝王なのだ」と書き、そのマゾを説明して「ナルシスト=マゾヒストは対象の魅力になっているのではない。自分だけを愛している。自分の美に恍惚としている。相手は自分の肉体に関心を持ち、かまってくれる人なら誰でもよいのだ。相手が自分の肉体のとりこになっているということだけで優越感を持つ。まして相手が自分の美に拝跪して自分なしにはいられないとすれば、相手はむしろ醜い方がかえって自分の美しさがひきたつかも知れぬ。自分を鞭打ち、傷つけるものは実は自分の奴隷に過ぎぬ。その上、マゾヒストの快感は直接肉体的であり、目をつぶっていてもいいのだから、肉体的なマゾヒストは心理的には暴君になり、相手を奴隷としてわがままの限りをつくす」と述べている。

だったら形式的には後退しながら心理的には、真の意味での帝王になっているのがオヤジなのかも知れんが、このくらいの説明では、納得できないのが実情でもあろう。それに、また個人差などあって—。